本興寺だより

令和三年
九月
第二二五号

「諸の衆生を見るに、生・老・病・死・憂悲・苦悩に焼煮せられ、また五欲財利を以っての故に、種々の苦を受く」

（法華経　譬喩品第三）

周囲の田園で稲刈りが始まりました。春に植えた小さな苗が何時しか大きくなり穂が出て実りをむかえます。当然のように普段見慣れている風景にも、自然界に存する命の不思議さを感じます。

人の命も、その生き方、考え方、他との接し方は自然界の生命が教えてくれているのだと云われます。

人の一生は、様々な苦悩に出会います。楽しみや喜びを求めて生きていますが、現実は多くの憂いや悲しみ、悩みに心が打ちひしがれます。

苦悩は自分自身の身体に関わることと社会生活の中で感じることに分けられます。①生まれ生きる中での悩み、②老いを認め感じる苦悩、③病を患う苦悩、④死への不安、を仏様は人生の四苦と云われます。

この四苦は人間の身体だけのことではありません。心と身体は車の両輪です。心の想いが身体に影響し、身体の好不調が心に投影されます。

私達はこの四つの苦のうち、ともすれば生と死は心の苦、老と病は体の苦と捉えがちですが、心も身体も生老病死があるのです。特に心の生老病死が大事なのです。「からだ」は「身体」とも「体」とも書きますが、「身体」は肉体だけでなく、心も含めた心身のこと。魂の宿った肉体のことで、人間に使うのが通常です。他は「体」を使います。人の身体は、「身」が主人公で「体」が従なのです。

先の四苦の中で、特に心の老い、心の病が純粋な体へも、また己の人生にも大きな影響を与えていることに、人は心底から気付いていないと仏様はいわれています。

自分の身体を見れば、年月を経ると老いをひしひしと感じてきます。足腰の衰え、目や耳の衰えなどです。しかし老いは万人共通だから他人との比較はさほどしません。

病は、老いが深まるにつれて誰でもそれなりに何時かは患うことではあるが、周囲の人を見れば、同年代でも年上の人でも元気な人がたくさんいると、比較して心が曇りがちになります。

老いや病は肉体の単独な衰えではなく、心の老いや病と相互に関連しあっているというのです。

苦とは、自分の思い通りにならないことです。挫折した時、「どうせ自分は・・・」とか「自分の将来は終わってしまった・・・」とか悲観的に悩むのは心の老いを深めます。また人生の目標が達成できなかったり、人間関係が冷えてきたら、そのストレスが心の病を生み出しやすいのです。

病気は気の病と書きます。誰もが避けたいと思い、好んで病気を患う人はいません。それでもなぜ気の病と書くのか？心の気がネガティブになると病気を誘発する一因にもなり、また逆に罹患している病の奇跡的な回復のためにも人間の持っている気の力が大きく左右するのだということです。

生老病死は生命のある以上避けて通れないことですが、心の老いと心の病を除くことが、自分の命を十分生き切れることにつながるということです。

人は皆、心の底に他人には言えない自分だけの深い煩悶（はんもん＝思い、わずらい、悩み）を抱えています。変わらない現実、変えられない現状、戻れない過去に心を痛めることもあります。

変わらない現実は目の前の事実として辛いことでも素直に受け入れることから運命の転機が訪れるのです。現実は今変わらなくても、それをどう捉えていくかの価値判断は変えられるのです。単なる不幸としてみるか、或いは次の飛躍への試練としてみるか等によってその後の運命が大きく変わりうるということを仏様は説かれています。

今、東京パラリンピックが開催されています。皆さん障がいを持ちながらもとても頑張っておられます。

アメリカで一八八〇年に生まれ、奇跡の人と呼ばれた「ヘレンケラー女史」がいます。生後一九か月で高熱に見舞われ、視力と聴力を失いましたが、その後家庭教師のサリバン先生の厳格で献身的な情操教育により、大変な障がいの中にも心を磨き、アメリカ女子の最難関の大学（現在のハーバード大学）を優秀な成績で卒業し、各方面で活躍されました。日本へは三度来日し、各地で講演もされました。この人の生涯をみると、人には塞がれた肉体の視力・聴力の他に魂（心）が感じ取る視力・聴力があることを教えられます。

この方は自身の一生を振り返り次の言葉を残しています。「私は自分の障がいを神に感謝しています。私が自分を見出し、生涯の仕事、神を見つけることが出来たのもこの障がいを通してだったからです」と。また「自分がこんな人間だと思ってしまえば、それだけの人間にしかなれない」とも。

仏様は、人は苦悩の中に埋没して、心も身体も焼け尽くされることなく、仏の智慧を得て、如何なる時でも光が指す道があることに気付き、自信を失うなと云われています。合掌　本興寺住職　中谷聰秀